
鹿角戦士せいんとくん

水色ペンキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鹿角戦士せいんとくん

【Nコード】

N1130F

【作者名】

水色ペンキ

【あらすじ】

K府K市に住む大学院生の俺は、N県の研究所へ異動する教授にくつついて、一緒にN県に行くことになってしまった。はじめはよくあることと思っていた俺も、そこで教授が行っている研究をみて、まずいことに首を突っ込んでしまったことに気づく。それはN県的主导で進められた、殺戮型人造人間『せいんとくん』を作りあげる研究だった。N県はこれを使ってK府、およびT都を滅ぼし、千二百年前に失われた都の栄華を取り戻すつもりなのだ……。

1 引越しのとき（前書き）

この小説に登場する土地、組織、人物、キャラクター等は、現実世界に存在するいかなるものとも、一切、何ら、まったく、これっぽっちも関係ございません。あしからずご了承ください。

1. 引越しのとき

「やあ、君もここを引き払うのか。指導教官が浮気性だと大変だね」隣の研究室の都鳥教授がいった。日焼けした顔にヤニだらけの歯を剥き出して、ニヤついた顔がいかに嬉しそうだ。

「ええ、西大寺教授が新しくできた研究所に移るっておっしゃるんで、僕もそこに机もらうことになったんですよ」

俺は山と積んだ研究資料を段ボールに詰めながら答えた。雑談をする暇が惜しい。引越しのトラックは今日の夕方に出ることになっていた。指導教官の西大寺教授が移籍すると言い出したのが三日前で、それに合わせて、俺まで大学から出て行くハメになったのだ。もつとも、学籍はここに置いたままだが。

「ラジ研ねえ。よくやるねえ。大学本部にいたほうが何かと有利だと思うけど。ま、きみの教官はちよつとアレだからね」

都鳥教授はくすくすと笑った。失礼な言いぐさだが、西大寺教授がちよつとアレだというのは否定のしようがない事実なので、なにも言い返すことができない。もつとも、この都鳥教授もたいがいの変人だった。というか、この学部の教官はみな変人だといっても過言ではないのだが。

「まあ頑張りなさい。困ったことがあったらメール頂戴よ。指導教官を変えて、こっちでやってくことだってできるんだから」

都鳥教授はそういうと、俺の返事を待たずに学生室から出て行ってしまった。まさか研究室を移るわけにもいかなかっただろうが、この人が俺に興味を持つのはなんとなくなる。なんせ、西大寺vs都鳥のライバル関係は学部内でも有名で、研究分野も似通っており、しかもこの五年間で彼らの下についた学生は俺一人なのだ。要は絶望的に不人気な研究室ってやつである。俺が西大寺教授の研究室に入ったのは、都鳥教授に比べていくぶん情熱家に見えたからといういい加減な理由からだ。それが単に年中躁状態であるせいだと

気がついたのは、院生になって最初の週のことだった。

理学部付属ラジカル生物学研究所。今年完成した小さな施設で、学内外から何人かの研究者が入ることになっていた。研究領域はてんでバラバラ。教授に見せてもらった名簿を見ると、初期メンバーはかなり微妙で、具体的にいえば、学会の発表スケジュールにおいて、ある一日の午後に全員集められてしまうようなメンツ、まともな研究者は昼であがって街中の飲み屋で交歓会をやり出すようなアフタヌーンに、閑散とした会場でひっそりと発表しているようなオン・ザ・エッジ研究者ばかりという感じだった。西大寺教授の異動を事実上の都落ちとみなす周囲の視線も、あながちハズレているとはいえない。

しかも実は、ある意味では文字通りの都落ちなのだ。研究所は大学のあるK府K市ではなく、南のN県にあるのである。金のない自分は急に引越すこともままならず、当面晴れた日はバイクで、雨の日は電車を使ってK市から通うつもりだった。そもそも移動がめんどくさい日には、研究所泊まりでやっていく覚悟である。

荷物をトラックに積みこんで運ちゃんを送り出したあと、俺は西大寺教授の携帯に電話をかけた。

「いま一通り送りました。私は掃除してからそっちへ向かいます。ほかに何か必要な事ってありました？」

甲高い教授の声が携帯から響いた。

「ご苦労さん。それだけでオーケー。受け取りはボクがやっておくよ。ちよつと遠いし、君は今日はもうこつち来なくていいよ。明日直で来ればいい」

「ありがとうございます。じゃあ明日、また」

2・研究所にて

翌日バイクで研究所を訪れた俺は、入り口の案内板を見て教授の部屋を探した。どうやら地下一階らしい。西大寺教授、こういう場所取りみたいな下品な争いには、とことん弱いほうなのだ。建物自体はできたばかりで美しく、壁面から漂う塗料の匂いが、気持ちいいような悪いような空気を醸成している。階段を降りると、地下一階の廊下にはまだビニルシートが貼ってあって、開けっぱなしの配電盤やら裸線むき出しのままの蛍光灯やら、電気系いまだ完成せずの印象をうかがわせていた。俺は目的の部屋の前まで来ると、軽くドアをノックした。

「うーん、どうぞ」キーこそ高いが、全然やる気なさげな声が答える。

「おはようございます、田村です」

「うーん」

部屋の大きさは十二畳くらいだろうか。本部の教官室よりはずいぶん広い。入ってすぐのところに昨日送った段ボールが山積みになっていて、奥のほうには教授のデスクと本棚、手前の角には多分俺のだろう、小振りな机が置いてある。

「ボクと同じ部屋の中なんて、いやーな感じでしょ。へへ」

教授がにやにやしている。

「でも大丈夫。あとでパーティション入れるし、ボクは多分この部屋じゃなくて、だいたい奥にいますから」

「奥？ この部屋にまだ奥があるんですか？」

「あるよ。実験室がね。いやこれがね、君には言っただけですけど、すごいんだ」

「はあ、と返事をして見たものの、ただスゴイといわれても困ってしまう。」

「見せてあげよう。そろそろ君も、ぼくがここでどういう研究をし

ているか、知っておいてもいい頃だ」

『しているか』？ 『するつもりか』ではなく？ そんな疑問が頭をかすめたが、教授はキーリングをチャラチャラと鳴らしながら部屋の奥壁に近づいた。そこは一見なんの変哲もない普通の壁のようだったが、壁面に一カ所、丸いシリンドーの鍵穴がついていた。

教授はそこに鍵のひとつを差し込み、かちりと音を立てて手首を回した。途端にゴトリと音がして、壁の中央がドアくらいの大きさに四角くへこむ。教授が壁を押すと、果たせるかな、壁は突然扉となつて、向こう側に大きく開いた。その奥はまっくらな通路になっており、数秒もすると、その暗黒空間から流れ出た冷たい空気が俺の足を洗うのがわかった。心なしかカビ臭い。

「ついておいで。これがあるから、ここに来たんだ」

驚いたことに、通路の壁や天井は、研究所と比べて遙かに古いコンクリートでできていた。防空壕か何かの跡だろうか。壁面からはぴたぴたと水が滴り、床のはじめに切られた水溝に添って、細い流れがちよろちよると光っている。天井には数メートルおきに、古くさい裸電球が下げられていた。

「教授、ここは？」

「戦前に作られた観測坑だよ。昔はここに傾斜計なんかを置いていたらしいが、土地が不安定で放棄されたらしい。それをN県が買い取って拡張し、秘密研究所を作った。そこで研究を請け負っていたのが、このボクさ」

「教授がですか？」

「そうだよ。ずっと前から」

通路は不意に行き止まりになった。つきあたりは合金の扉になっていて、そこだけ新しいピカピカのノブが、薄い明かりに冷たく輝いている。

「ここだ。えーと、ドアを開ける前に言っておく」

「なんですか？」

「ここを入ったら最後、君もボクも運命共同体だ。君はボクの研究

計画の一員となり、脱退は許されない。もしそれが嫌なら、扉は開けない。引き返すけど、どうかな」

「何なんですか突然。そんな話、私は聞いてなかったですけど」

「そりゃあ、言ってなかったからね」

「このドアの向こうになにがあるか、知ってからでは遅いんですか？」

「遅いなア」

「ちよつと待つてください。考えを整理します」

何なんだこの仰々しい雰囲気は。この向こうになにがあるっていうんだ？

「一応言っておこう。学位を狙うなら、これには参加したほうがいい。あと、これに参加すれば君にもN県から補助金が出る。いいことづくめだよ」

「もし……拒否したら、どうなるんです？」

「それは、聞かない方がいいな」

「どうやら一枚噛むしかないらしい。大学とはそういうところだ。」

「じゃあお願いします。俺もそれに参加させてください」

「OK。君のことだ、そう言ってくれると思っていたよ」

教授はキーリングをちやらちやらと鳴らし、今度は別な鍵をドアノブの下に差し込んだ。ガチャリと音がした。教授がノブを回してドアを押すと、奥にちらちらと点滅するダイオードの光列が目に入った。

「入りなさい。ようこそ禁断の城へ」

次の瞬間、部屋の照明が点灯した。俺は思わず息を呑んだ。

3・せいんとくん登場

中は二十畳くらいの部屋だった。入り口のほかに出口はみあたらない。窓もない。壁に添って見慣れない機器がずらりと並び、無造作に置かれたいくつもの長机の上に、各種の実験器具が並んでいる。机のひとつには、A4用紙に印刷された文献がうずたかく積まれていた。床の上には太いコード類に混じって、よくわからないパイプのようなものが縦横に走っていた。そして部屋の中央に、恐るべきものがあつた。B級SF映画に見るような、緑色の液体に満たされた培養槽だ。培養槽はそれだけで十畳間ほどの広さがあり、高さは天井につかんばかりだ。槽の中には巨大な幼児、いや太り気味の少年か、が仰臥していた。少年は色黒で、頭からはねじくれた二本のツノを生やしている。ツノは側頭部から真横に生えていたが、生え際から急角度に上方向に曲がって、ノコギリクワガタの鋏のように二本揃って鋭く頭上をさしていた。

「紹介しよう。N県委託の研究生物、Saintくんだ」

「せ、せいんとくん」

「そう。N県の切り札だよ。ボクは十年前から、ここで『せいんとくん』を育ててきた。新設された研究所は、むしろこの実験室の付帯施設なんだ。『せいんとくん』は優秀な生物兵器だ。高い身体能力、人間に近い頭脳、恐るべき戦闘力を持った殺戮マシンさ」

「教授、そんなものを作っていたんですか……」

「まあ聞け。『せいんとくん』は高度な研究の精華だ。これを発表すれば、世界中の軍需産業からお呼びがかかるだろう。N県に渡すのはこれ一体だけだが、作ろうと思えばいくらでも作れる。火薬の発明に匹敵するイノベーションだよ。ただ、ボクも信頼できる助手がほしくてね。君がやってくれるとありがたい」

「……」

「嫌なら嫌と言ってくれ」

どういうことだ。部屋に入る前、計画からの脱退は許さないと
言っていたじゃないか。殺戮兵器。N県の依頼。軍需産業……。そう
か。ノーと言えば殺される。そういうことなんですね、教授。

「やります。任せてください」

「よし、それでこそ僕の学生だ」

教授は安心したように微笑んで、それまで手で弄んでいたキーリ
ングを、背広の内ポケットに入れようとした。そのとき俺は、教授
が脇の下に拳銃をぶら下げていることに気がついた。やっぱりね。

「いまから君も共犯だ。いや言い方が悪いな。われわれは別に悪い
ことをしようとしているわけじゃない。県警にも話は通してあるし、
そもそもが県庁の依頼だ。むしろわれわれは正義の代行者といって
いい」

そうだろうか。

「県警も、県庁も、運命共同体ってことだな。さて、計画に参加す
るために、ひとつ必要なことがある。君はできるだけ早く、この県
に引越さなければならぬ」

「引越し？ なぜです？」

「『せいんとくん』を操るには、N県民であることが必要なんだよ
なんだそりゃ。」

「え、でも教授はK府内に持ち家を持つてらっしゃいますよね」

「うん。僕も引越すよ。県民でなくちゃならないのは、こいつを
起動してからのハナシだ。ただその日はもう遠くない」

「じゃあちよつと時間が欲しいです。バイトして引越し代を貯め
ない」

「ああ、それはN県から出るから大丈夫。予定を組んでくれれば、
担当者に言って手配させるよ」

「はあ」

教授はさて、といって培養槽に近よった。緑色の液体に充たされ
たガラス面を、手の甲でこんこんと叩く。

「じゃあ説明しよう。具体的に『せいんとくん』が何者であるかを

あれ？ 培養槽がぬるいな」

「そうなんですか？」

「おかしいな。冷却装置の調子が悪いのかな」

教授は培養槽の脇にある、パイプが出入りする金属の箱に触れた。
「……動いてない。いつからだ？ 壊れたのかな。まずいぞ」

教授は太い電源ケーブルを辿って、壁際のコンセントのところまで歩いていく。

「もしかして、ここまで電気が来てないのか？ 電気系統はきのう、タイムラグなしで研究所側に切り替えたはずなのに」

「どういうことですか？」

「もともとこの地下研究室には別電源を引いていたんだ。今回あそこに研究所を建てることになったから、電源系をあっち経由に統一したんだよ。でも、重電系がここまで来てないみたいだな。まずいな。培養液の温度が二時間以上十五度を上回ると、こいつが目覚めてしまうんだが」

「そういえば、来るとき配電盤とかうつちゃってありましたね。もしかしたら、工事が済んでいないのかも」

「計器類は動いてるから、軽電は来てるっぽいんだけどね。君、培養槽のそちら側に水温計があるだろう。何度を指してる？」

俺はなるべく中に横たわる生きものを見ないようにして、培養槽に近寄った。水温計は十五度よりも少しだけ上を示していた。

「十五・四度くらいですね」

「ふむ。気温よりはかなり低いな。ポンプが止まってまだそんなに経ってないのかな。なににせよ、すぐに関西エレパワーに連絡しよう。このままだと危険だ」

「こいつが起きるとまずいんですか」まずいんだろうなあ。

「この強化ガラスが破られることはないと思うが、一回起きてしまつと、もう一度寝付かせるのが面倒だね。まあ薬で眠らせればいいんだけど、寝相を調整するのが面倒なんだよ」
「なるほど」

「じゃあ、研究室に戻ろうか。電話はいまあつちにしかないんだ」
教授がそう言ったとき、『せいんとくん』のつぶらな瞳がパチリと開いた。巨大な黒目がすばやく動き、一瞬だけ俺と目があつた。俺は思わず息を呑んだ。『せいんとくん』は水槽の中で、肉厚な頬をニヤリと歪めた。ドアのところで、教授が振り返った。

「どうした？ 早く来たまえ」

「教授、目が、目が開きました」

「なんだって？」

『せいんとくん』は素早く起き上がった。禿げ上がったおでこが水槽の天井に当たって、ごいんと大きな音を立てる。高さが足りないことに気づいた『せいんとくん』は、立ち上がることを諦めて水槽の床を転げ、俺とは逆側の壁に体当たりした。どんというすさまじい音が起こり、激しく攪拌された緑の液体が、水槽の中に淡い濃淡の縞模様を描く。

「大変だ！ 麻醉システム作動を！」

教授はそう言って機械のひとつに駆け寄ると、青い大きな丸ボタンを殴りつけた。しかしなにも起こらない。ばんばんと連続して叩いても、やはりなにも起こらなかった。

「それも重電系なんじゃ？」

「しまった。いままで使ったことないから、気づかなかった」

「どうするんです」

「逃げよう。とにかく危険だ。はやくこつちへ」

教授の言葉が終わらないうちに、培養槽のガラスが破られた。ひどい匂いのする緑の液体があふれ出して、どどっという音とともに床面を洗う。俺は咄嗟に近くの長机に飛び乗った。教授は一瞬立ちすくんだあと、身を翻してドアノブに手をかけた。その瞬間、培養液が教授の足元に達した。

バチリという音がして、教授の体がのけぞった。手足を微妙に曲げたまま、痙攣したように体全体を震わせている。感電したのだ。
「教授！」

俺は焦った。助けにいいこうにも、床に足をおろせば教授の二の舞になる。慌てて周囲を見まわしてみたものの、使えそうな棒その他の道具は見あたらなかった。だが、その心配もすぐにどこかへ吹き飛んだ。床に降りたった『せいんとくん』が、四つんばいでのつしのつしと教授のほうへ歩き出したのだ。『せいんとくん』は教授の前までくると、横目で俺のほうを見て、口元だけでニヤリと笑った。「この、ひと、K府、すんでる、いつてた、ね？ さっき、ね？」俺はたまげた。この怪物、人語を解するのだ。巨大な童子は繰り返した。

「K府、すんでる、いつてた、ね？ よね？」

俺はあまりのできごとに気圧され、思わず頷いてしまった。

「あ……ああ。言ってたよ。言ってた。なあ、『せいんとくん』、教授を水から持ち上げてくれな」

言いかけたとき、とんでもないことが起こった。『せいんとくん』は教授の体にのしかかると、文字通り頭からがぶりと貪りだしたのである。ボリボリッ、ミチャミチャッと、聞き慣れぬ凄まじい音が出た。と同時に、巨大な口から真っ赤な血潮が吹き出して、教授の胴体から下、それと色だけは綺麗だった緑の培養液に、くろぐろとした汚れを広げたのだ。

俺はさすがにぶったまげて、声にならない叫びをあげた。

4・脱出

ボリッ、ゴキッ、……

俺はその一部始終を、長机の上から見ていた。見たかったわけはない。体が動かなかったのだ。子どものころ図鑑で見た『オスを食べるメスのカマキリ』の写真のように、図体の巨大な人間風の生きものが、自らのミニアチュアをむさぼり喰って、食われるほうは弛緩した体を、なすすべもなく相手の口からぶら下げている。おぞましい光景だった。

モンスターは西大寺教授の体をへそのあたりまで食ったところで、突然食事を打ち切った。打ち捨てられた下半身が、水の中にぼしやりと落ちる。

「あ、あ、あ……」

俺は腰が抜けていた。『せいんとくん』は俺のほうを見て、またニヤリと微笑んだ。怪物は言った。

「きみも、K府、すんでる、の？」

「あ、あ」

巨大な体向きを変えて、水を撥ねたてながらこちらへと這い寄ってくる。

「K府、すんでる、の？」

その瞬間、俺の中の生存本能が、俺の脳をシフトチェンジした。

このグロテスクで恐怖に充ちた状況を、とりあえずあるものとして受け入れることに成功したのだ。俺の思考能力は回復した。

「違う！俺はK府民じゃない！」

「じゃあ、どこ、なの？」

「千葉！俺は千葉県生まれ！」

『せいんとくん』は急に俺から興味を失ったようだ。「ふうん」
気のない返事をする、その顔から笑顔が消えた。モンスターは向きを変え、部屋の隅にある大きな金属ボックスへと向かった。その

蓋を掴み、メキャツという乱暴な音をたててこじ開ける。脂肪でふくよかな童子の手が、箱の中から、青と赤の布でできた大きな袈裟を取り出した。

「ふく、ないと、はずかし」

ちらりとこちらを見て、また一瞬だけニヤリと笑う。俺もひきつった笑顔で返した。もしここに誰か別な人間がいたら、きっとそいつは俺を狂人だと思ったに違いない。

「じゃあ、ぼく、いつて、くるね」

袈裟をまとった『せいんとくん』は、研究所へと続く金属のドアに近づき、力任せに壁からひっぺがした。とたんに床上の水が廊下にあふれて、ざあざあと音たてて流れ去っていく。

首だけ廊下に突っ込んだあと、『せいんとくん』は廊下の狭さに気づいたらしく、ふたたびこちらを振り返った。

「せまい。とおれ、ない」口が不満げに引き結ばれている。

「おまえ、でぐち、しってる？」

「さ、さあ、そこしか知らないな」

床の水はこのとき既に、ほとんど残っていないかった。

「おまえ、やく、たたない」

童子は不満げな顔をして、ドア脇の壁に手をついた。破れる箇所を探しているのだろう。むっちりした手が壁を押すと、壁面をコーティングしている石膏か何かの層が割れて、ばらばらと破片が床に落ちる。だが隠し扉などはないようだ。『せいんとくん』は壁に掌の跡をつけながら、壁伝いにじりじりと移動していった。

『せいんとくん』がちょうどドアの反対側まで来たとき、俺は大きな賭けに出た。床に残った僅かな水では、もう感電しないと踏んだのだ。自信はなかった。俺は長机から飛び降りると、素早く通路に逃げ込んだ。感電しなかった。通路の中に入ってしまったら、さしあたりあの怪物は追ってこれまい。ちらりと振り返ってみたが、予想に反して、あの怪物はもう、俺がどこに行こうと無関心なようだった。俺は通路を駆け抜けて、逆側のドアにとりつき（幸いにも才

ートロックではなかった)、それを開けて研究室に転がりこんだ。そこはさっきまでの大惨事が嘘のように、なんとも平穏な佇まいだった。俺は教授のデスクの受話器を取ると、素早く110番を押した。

「N県警です」

「あの、怪物が、えっと」

「はい？ いたずらですか？」

「いえ、あの、せいんとくんっていう」

「ああ、S計画関連ですね。少々お待ち下さい。担当の者に代わります」

受話器からポール・モーリアの軽快な曲が流れ出す。なにを呑気な、こんなときに。

ブツリという音とともに、中年の男の声が受話器の向こうにあらわれた。

「お電話代わりました。山下です」

誰だろう。ってか、担当者って何だ。県警に話を通したというあれか。

「えーとですね。ラディカル生物学研究所の西大寺研究室ですが、実験動物が暴れてまして」

俺の声を聞いて、男の声に警戒するような色が混じった。

「あなた、西大寺教授じゃないですね？ どなたですか？」

「西大寺研究室の院生で、田村といいます。とにかく大変なんです。来ていただけますか」

「西大寺教授に代われますか？」

「教授は殺されました。あのバケモノに」

「殺された？ 本当ですか？」相手の声が急に動揺した。受話器の向こうのどこかで遠くで、ひそひそと話す低い声が聞こえた。

「それで、あなたは生き残っているんですね」

「あたりまえです。こうやって電話してるんですから」

「そりゃそうか。で、アレはどうしました？ 逃げ出したんですか

？」

「まだ実験室にいます。大きすぎて、研究所とのあいだの通路は通れないみたいで」

「ハッチは閉まってるんですね？」

「ハッチ？」

「実験室の天井の」

「ハッチがあるんですか？」

「……」 受話器の向こうに、一瞬沈黙が降りた。

「もしもし？ とにかくヤバそうなので、すぐに来て下さい」

「……」

「もしもし？ もしもし？」

「……あなた、本当に西大寺教授の学生さんですか？」

「え？」

「どこまで知ってるんです？ この計画について」

「いや、俺もさっき聞いたばかりで」

「田村さんとおっしゃいましたね？ こちらの名簿にはないものですから」

このとき受話器の向こうでサイレンを鳴らす音が響いて、すぐにフールドアウトしていった。

「だから、さっき初めて聞いたばかりなんですって」

「みよしの やまのしらゆき ふみわけて」

「はあ？」

「みよしの やまのしらゆき ふみわけて」

「なんですか急に。なんでもいいんで、とにかくすぐ来て下さい」

「ひとつだけ質問に答えてください」

「え？」

「あなた、住民票はどこに置いてますか？」

「K市S区です」

受話器の向こうの声が、ほんの僅か緊張するのがわかった。後ろのほうで、「……おい、K府……」とかいう囁き声がしたようだ。

一体何だっつんだ。畜生。早く来やがれ。

「K府K市ですね。なるほどなるほど。なるほどね。そこを動かさないでください。すぐに署員が参ります」

できれば逃げたいんですけど。そう言いかけたとき、いきなり通話が切れた。不自然な切れかただった。通話が終わると、急に孤独が身にしみた。この通路の向こうに、恐るべき殺戮マシンがうごめいているのだ。勝手に逃げようかとも思ったが、アイツが通路を押し広げてまでここにやってくることはなさそうだったので、とりあえず警察が来るまでは、ここに留まることにした。やがて、パトカーのサイレンが聞こえてきた。

しばらくして、激しい足音とともに警官が踏み込んできた。その数六人。それにボス格らしきコールテンの背広を着た中年の男がいた。彼らはどやどやと研究室に入ってくると、いきなり俺に掴みかかった。

5・農

「10:33、容疑者確保!」

さすがにこれには驚いた。

「イテテ! なにするんですか! バケモノは俺じゃない、通路の向こうの」

警官は三人がかりで俺を組み伏した。あつというまに手錠をかけられる。

「あなたには黙秘権がない。あなたの供述は、こちらに都合のよい部分だけが採用される。あなたには弁護士との立ち会いを求める権利はない。当然、公選弁護人はあなたとは何の関係もなく」

「公選弁護人って、日本じゃないでしょ。こんなときに何の冗談です」

コールテンの男が笑っていった。

「面白いだろ。要するに、君は裁判所を経ないで裁かれるってことさ」

「なんですって?」

「具体的に言つと、君はこの研究所を出ることができない。このまま消えてもらう」

「消えてもらうって、帰ってことですか?」

「草葉の陰に消えてもらうってことだよ」

「そんな、なぜ」

「中途半端に知りすぎてしまったからさ。よくあるだろう? こういうシーン」

「わけがわからないですよ」

「いいだろう。映画やドラマでも、死者には知る権利が与えられるものな。じゃあ、道すがら説明しようか」

警官たちは俺を引きずりながら、通路を実験室のほうへ歩き出した。

「ちょっと、あそこはヤバイですつて。全員殺されますよ。ねえ！」

「大丈夫さ。ここにいる者は、全員県内通勤者だ」

「はあ？ 意味わかんないですよ」

「奴はN県民には手を出さない。なぜだかわかるか？ 奴はN県民の血税で作られたソルジャーだからだ。よし、ここで止まろうか」

実験室まであと五メートルというところで、一行は歩みを止めた。
「あれはね、N県が名誉を回復するために作られた、殺人兵器なんだよ」

「殺人兵器だつてことだけは、何となくわかりました」

「『せいんとくん』は西大寺教授がつけた愛称だ。正式名称は、『ルサンチ・マン一号』という」

「ルサンチマン……」

「ルサンチ・マンだ。俺たちN県民は、一千年以上もの間、いろいろ辛酸をなめ続けてきた。一千三百年前、ここには素晴らしい都がおかれた。ヒラジロ京だ。だが、K府が、当時はY城国だが、とにかくK府が、俺たちから永遠の都を奪ったのだ。それがヒラヤス京だ。わかるかね」

「それがどうしたつていうんです。あと、あいだにちょっとだけマイナーな都があった気がしますけど」

「十年程度で放棄された都なんぞどうでもいい。とにかく、都を奪われて以後、俺たちN県民にはなにもないんだ。一千二百年前に奪われた絢爛な都の記憶、それにすがって生きるしかないんだ。わかるか、この悔しさが」

「わかりませんね。そもそも何もないなんてことはないでしょう。古墳とかあるじゃないですか。K府にはああいうの、あんまりないですよ。あと大仏とか。鹿のいっぱいいる神社とか。桜で一杯の山もありますね。ステキステキ」

「わかってないな。総合力じゃあN県はK府に太刀打ちできない。外国からの知名度でも横綱と幕下くらいの差がある。それというの

も、都が、都がね、要するに都が……」

「わかりましたわかりました。悔しいんですね。それはわかりました。それで、なんであんなモノを作る話になるんです？」

「我々は県民の総力を結集して、ルサンチ・マン一号を作りあげた。君の教官だった西大寺教授、あのひとも元はこの県の出身でね。あの怪物を量産すれば、K府とT都を滅ぼして、N県はもういちど都の夢を見ることができる」

「T都まで……」

「そうだ。我々は、あの栄光を取り戻すまでなんぴとも容赦しない。君はK府の人間だそうだね。いい生け贄だ。君も彼の血や肉となって、我々に協力したまえ」

そういうと、コールテンの男はひとり前に進み出て、戸口の前に立った。

「ルサンチ・マン一号、食事を持ってきたよ。この男を食べたら、今日はもう寝るんだ」

怪物は頭上のツノで天井をつつき、そこに穴を開けることに成功していた。床にガラクタを積んでその上に立ち、穴を広げようとむちむちした手で天井板をいじくっている。ハッチは天井からくりぬかれて、部屋の片隅に投げ捨てられていた。部屋の外からは、袈裟を着た怪物の、ヘソから下しか見えなかった。

「食料を持ってきた。この男を食って、今日は寝なさい」

「んー？ なに？ いま、いそがしい」

『せいんとくん』は腰を屈めて、天井から下に首を覗かせた。ぎよろりとした目がこちらを睨む。俺の腰は、もうなかば抜けかけていた。

「ごはん？ なら、こっち、おくれよ」

じりじりと後ずさりする俺を、警官たちが部屋の中に突き飛ばした。俺はよろけて、部屋の中にへたり込む。すぐ目の前に、どすりと裸足の足が降ろされた。恐る恐る見上げると、マンシヨンの給水塔くらいはあるつかという巨大な頭が、俺の上にのしかかってきた。

正気、正気を保たねば。待て、俺の思考。俺の判断を助けやがれ。どこかに逃げ道はないのか、どうにか生き残る方法はないのか？ えっとその、えー。

『せいんとくん』は俺の腰をつかみ、両手でぐいと持ち上げた。大きな顔が目の前に迫る。ステンレスの手錠が、俺の正面でジャラジャラと鳴った。ええいもう、失禁許可いすかキャプテン！

「このひと、ちがう。ちばのひと。ぼく、たべない」

怪物は突然そういうと、俺の足を床に降ろした。俺は驚いた。コールテンの男も驚いたようで、慌てて『せいんとくん』に言い返した。

「そいつはK府民だ。お前の敵だ。いいから食ってしまえ！」

「ぼく、かんけいないひと、たべない」

「いうことを聞け、ルサンチ・マン！ そいつがそう主張したのかわらないが、それは嘘だ。そいつはK府民だ！」

怪物は、俺の顔をまじまじと見た。

「うそ、ついた、の？」

「いやいやいやいやいやいやいやいやいや」

「ほんと、なんだ、ね？」

「ほんとほんとほんとほんとほんとほんとほんと」

「じゃあ、やつぱり、ぼく、たべない」

そういうと、『せいんとくん』は俺の手錠の鎖をつまみ、ハナクソを丸めるみたいに指の間で転がした。とたんに鎖がすり切れた。恐るべきパワーだ。そしてこの怪物は天井に開けた穴の真下に歩いていくと、俺を天に向かって放り投げた。

「ばいばい」

俺は青空に向かって上昇し、空中の一点で停止した。と思うまもなく落下して、芝生の上に激しい音を立てて着地した。そこは原っぱの真ん中に作られた、小さな築山の上だった。傍らには大きな穴が開いていて、そこから二本のツノが見え隠れしている。下でなにかを叫ぶ声が聞こえた。

俺は起き上がると、向こうに見える研究所の駐車場に向かって走ろうとした。バイク。バイクまで逃げおおせれば、この気違いじみた土地からおさらばできる。だが体がいうことを聞かない。腰が抜けていたのだ。そういえばそうだった。俺は両手を芝生に突いて、四つんばいで駐車場へと向かった。畜生、だめだ、これでは間に合わない。

そのとき、尻のポケットでピロリロリという電子音が鳴った。携帯メールの着信音だ。こんなものがあることをすっかり忘れていたが、今はメールを見る余裕なんてない。

だが、そのメール着信が俺を救った。別なことに気をとられたのがよかったのか、突然腰が正常に戻ったのだ。立ち上がれる。俺はすつく、とは言えないが、よたよたと立ち上がると、リタイア寸前の箱根走者のように走り出した。逃げろ、逃げろ、ラン・フォー・マイライフ！

6・逃亡、そして追跡

俺はなんとかバイクまで辿り着いた。まだ追っ手は現れない。もしかすると下で大変なことが起こって、俺のことはもう放置扱いなのかもしれない。だがとりあえず、ここを離れるにこしたことはない。俺はキーシリンダーを回すと、十年落ちのCB250で道路の上に乗らだした。一路北へ、N県の外へ。

検問がある可能性に思い当たった。県警は俺を消しにきたのだから、黙って見逃すはずがない。案の定、五キロも行かないうちに渋滞が見えて、その先に検問があることが予想された。どうする。脇道にそれるか、それとも

と、後ろからヒタヒタヒタという不吉な音が聞こえてきた。俺はバックミラーを見て、危うく気を失いそうになった。『せいんとくん』だ。ニヒルに笑うむっちむちの童子が、ものすごいスピードで駆けてくる。色黒の肌が日差しに映えて、はためく袈裟が仏画でみる、雲に乗った人の衣のように皺をよせてなびいている。いつのまにか、二本のツノの角度が変わっていた。今やそれは深呼吸をする人の腕のように開いて、頭の左右に威嚇的に先端を伸ばしていた。前に検問、うしろに怪物、怪物の後ろには恐らく俺か『せいんとくん』を追う、県警のパトカーが迫っているだろう。やばい。どうする。ここは何食わぬ顔で『せいんとくん』をやり過ぎし、怪物の到着で検問が浮き足だったところを突破するしかないのではないか。うん、そうするかなさそうだ。

『せいんとくん』は俺を追い越しざま、えくぼのある顔を傾けながら、横目で俺の顔を見た。「ちばのひとだ」怪物は言った。ということは、まだ俺の偽装はバレていないということだ。俺はにこやかに微笑んで、怪物に軽く話しかけた。

「君は足が早いね。そんなに急いで、どこへ行くんだ？」

「K市。みなごろし、する」

「そうか。がんばれよ」

「うん、がんばる」

俺は暗鬱な気分になった。やはりこれは殺人マシンだ。

と、そのとき急に気がついた。バイクの後ろについているナンバープレートには、K府陸運局のKの字が書かれているのだ。それは俺がK府民であることの証明にはならないが、見られないにこしたことはない。俺はほんのちよつとだけ後輪ブレーキをかけて、『せいんとくんを』に迅速に追い越させた。

怪物は俺を残して走り去った。やがて検問のところで大騒ぎになったようだった。恐らく一般の交通課員などは、このモンスターのことを知らないのだろう。つまり、この検問は俺を捕らえるためだけに張られたものだ。よし。

『せいんとくん』が検問を通過して、封鎖の警官が茫然と怪物の背中を見ている隙に、俺はスピードを上げてそのピケットを突破した。走り抜けざま、驚く警官の罵声が聞こえた。とにかくK府だ、K府警の管轄下まで入れば、この地獄のN県警追跡網からは逃れられる。俺は力走する『せいんとくん』の背を見ながら、五十メートルほどの距離を置いてそのあとに続いた。後ろでサイレンが鳴り響き、県警の追跡が始まったことがわかった。この二百五十CCのバイクで、逃げ切れるかどうか。畜生。

ここで俺はあることに気がついた。もし『せいんとくん』がK府民を殲滅するつもりなら、県境を越えたところで仕事にかかる可能性がある。つまり、県境を越えるまえにK府警かU市の自衛隊駐屯地か、そういった防衛力のある施設に連絡をしておかなければならない。いや待てよ、さっき『せいんとくん』はK市に行くといったのではなかったか。そうするとS町やK田辺市、J市はスルーかもしれない。いやしかし、聞き間違い、解釈の違いということも……。

とにかくどこか外部に知らせよう。なるべく早く、県境を越えるか、県警に俺が捕まってしまう前に。俺は顎ヒモをかけたままでメットを後頭部に落とし、左手をハンドルから離して、尻ポケットに

入れていた携帯を取り出した。すさまじく反社会的な運転行為なので、こういう時以外はやってはいけない。二つ折りのボディを開くと、液晶画面に先ほどの着信メールがポップアップされているのが目に入った。ワンタッチで内容を表示する。

送信元：都鳥（miyakodori@k***.k-u.ac.jp）

件名：新しい城はどうだい？

本文：きれいな建物で研究できるなんて羨ましいよ。ぼくもあやかりたいあやかりたい。

次に本部に来るときには、西大寺君の様子を聞かせてくれよ。

この教授には、友人とかいないのだろうか。いやそんなことはどうでもよい。俺は左手で返信ボタンを押し、『で』-『ん』-『わ』を押して予測変換候補を探す。思った通り、『電話して』が上位に来了。このまま変換し、即座に送信した。激しくタメ口だが、気にしている余裕はない。

そうこうするうちに、怪物と俺はK府内に入った。さすがに他府県で横暴はできないのだろう、N県警もそこまでは追ってこなかった。『せいんとくん』はこの地点ではまだ、殺戮行為を開始しないようだった。一安心だ。童子は相変わらずツノを左右に振りつつ、ぼつちやりした肉体に見合わぬ速度で国道を走っている。と、都鳥教授からコールがあった。

「はい、田村です。よかった連絡がついて。大変なんです、都鳥教授」

「あー、うー」

教授は俺のメール文体に文句でも言うつもりだったのか、こちらからまくし立てると混乱したようなうめき声を上げた。

「西大寺教授は亡くなられました。いま、西大寺教授の作った人造人間みたいなのが、K府に、そっちに向かってるんです。いまちよ

うどK田辺のあたりです。あいつはK府民を皆殺しにするようにプログラムされてるらしくて」

途端に、携帯の向こうから都鳥教授の哄笑が起こった。

「え？　なんだって？　死んだ？　西大寺のやつが？　あっはあ、なるほどね、おっほお、それはそれは。やっぱりね、N県でそんなの作ってたんだ。そうだと思ってたよ。で、我が子に殺されちゃったのね、へへ。彼らしいなあ。うんうん、警察と自衛隊ね、わかった。K市に入るあたりでヤバイことが起こりそうなのね？　うんうん、わかった。オッケー、準備しとく。じゃ」

通話が切れた。俺は携帯を胸ポケットにしまい、また両手でハンドルを握った。しかし都鳥教授、準備しとくってなんだよ。通報しとくとかではないのか。しかしそれ以上考えるのはやめにした。とにかくこうなつた以上、『せいんとくん』の動向を見極めて、できるかぎり被害が少なくなるように行動するのが俺の使命だろう。

やがて道路はJ市に入り、あたりが随分と町めいてきた。道行く人は道路を疾走する巨人を目にして、腰を抜かしたり失神したりした。だが『せいんとくん』は、それら全てを無視して道を駆け抜けていった。まさに疾風のごとき速度である。俺たちはU市に入った。ここでも通行人を脅かす以外に実害はなく、ただただK市を目指して北上していく。

そしてついに怪物は、U市とK市F区との境界をなす小川を渡った。だが、ここでも奴は行動を開始しない。回りが駐車場ばかりだからか。俺の予想では、このへんで大防衛戦が展開するはずだった。配備が間に合わなかったのか。でもパトカーの一台くらい、待ち伏せしてもよさそうなものだ。いやそもそも、『せいんとくん』はなぜ行動を開始しないんだ。F区では田舎すぎて不満なのか。だとしたらどこまで行くんだ。K市の中枢を叩くとか？　市庁舎？　府庁？　古寺？　神社？　X文字山？　それとも　？

俺ははたと思い当たった。この国道2*号を北へ行くと、最終的にK市駅の近くに出る。そこには有名なKタワーと、ゴッズイラア

ーが映画の中でアタックした、巨大な駅ビルがそそり立っている。人通りも多いだろう。もしかして『せいんとくん』はそこまで一気に乗り込んで、そこで初めて凶行に及ぶつもりなのか。

それは最初はたんなる疑問だったが、『せいんとくん』が脇目もふらずにこの国道を邁進するのを眺めるうち、確信に変わった。そして事実、そうなったのである。駅近辺の市街地に入り、JR線をまたぐクラクカーブを通過した『せいんとくん』は、S小路通りで国道を外れて、K駅北口バスターミナルに向かった。そこまで武力による妨害などは一切なかった。都鳥教授、いったいあんたはなにをやっているんだ。自衛隊はどこだ。警官隊は。

7・もうひとりの人造人間

と、見慣れたK駅北口の前に、クリーム色のなにか巨大なものがうずくまっているのが目に入った。それは布でつくった小山のようで、その上には斜めに傾けた、これまた巨大な茶色い円盤が乗っている。小山そのものにはトリコロールカラーのストライプが入っていた。なんだあれは。どこかで見たことがあるぞ。

『せいんとくん』はそれを見て、何かを感じ取ったようだった。ここまで一時間彼の足どりを観察してきたが、ここへきて足さばきに緊張の色が見え隠れしたのである。それは敵を目前にした、獣の反応であった。『せいんとくん』は小山の前までくると、そこでぴたりと立ち止まった。

「おまえ、だれだ、おまえ」

俺は地下道入り口の裏にバイクを置いて、すぐさま戦場に駆け寄った。そこからは小山と怪物を、ちょうど真横から観察することができた。気づけば周囲に人影がない。いや、目の届く限りの範囲にまったく人影がなかった。ということは、これは『せいんとくん』が来ることを予想して、あらかじめ張られた罠なのか。

呼ばれて小山は、ゆっくり、のっそりと路面から立ち上がった。

俺は思わずあっと叫んだ。

「京野ゾミ！」

ゾミちゃん。ヒラヤス建都千二百年のマスコットキャラクターで、狩衣を着た二頭身の公家少女だ。手にした編み笠を目深にかぶり、それが『せいんとくん』とほぼ変わらない大きさで、いや、胴回りの太さからいって実質的にそれ以上のサイズで、人造人間化しているのだ。

「都はね、K府のものよ。あなたなんかには渡しません」

ゾミちゃんのはつきりした発音でそう言った。そして編み笠をはずし、楯のように体の前に構える。

「千二百年の重みとたかだか八十年の軽さ。格の違いを見せてあげるわ」

それに対し『せいんとくん』、少したじろいだ様子で反論する。

「ぼ、ぼくには千三百ねんの、ながい、れきしが」

「それはヒラジロ建都から今までの年月でしょう。でも千二百二十年前に、ヒラジロ京は滅んでいるの。それ以降も含めて都の実績のように語るのは、ちよつといただけないわね。詭弁よ、詭弁」

「うる、さい。ぼく、ぼくは、N県民のために……」

「わたしだってK府民を守らないといけないのよ。あなたは敵だわ。残念だけど、あなたには死んでもらわなくてはなりません」

俺はゾミちゃんの饒舌に面食らった。同じような生物兵器だろうに、『せいんとくん』とのこの差はなんだ。

両者にじり寄った。と、先手を打ったのは『せいんとくん』だ。

両手をバレリーナのように天にかざし、つま先立ちで激しく回転しながら、ツノでゾミちゃんのほうへ切り込んだのだ。だがゾミは硬い編み笠でそれを受け流した。しかも回転の力をはじき返して、逆に『せいんとくん』のほうが尻餅をついてしまう。

「おまえ！　ちから、つよいな！」

「もともとデキが違うのよ。あたしはあなたとは違って、都鳥教授の傑作なの」

都鳥教授！　ということとは、あの人もこのようなものを作っていたというのか！　しかも西大寺教授の『せいんとくん』よりも、知能、パワー、技術、全てにおいて優れている……ように見える！　俺は研究室の選択を誤ったかと、少し後悔した。

『せいんとくん』は突如、般若のようなしかめつらをした。顔の筋肉が盛り上がって、ヒマラヤ山脈の立体地図のような皺を形づくる。と、ツノの向きが変わりだした。ツノは根元から回転すると、徐々に先端の方向を変えていく。さきほどの回転技が通用しないとみて方針を変えたのか、ツノは最初に見たときと同じ、クワガタのアゴのような形になった。

「い、く、ぞー！」

『せいんとくん』は頭を下げると、猛牛もかくやという勢いでゾミちゃんに向かって突進した。ゾミちゃんはそれを鼻で笑い、またもや自慢の編み笠で受け止めようとする。だがツノが編み笠に触れようとした瞬間に、『せいんとくん』が奇妙なステップを踏んでブレイキをかけた。ゾミちゃんのふるった編み笠は、間一髪の差で空振りに終わった。

「くっ」

ゾミちゃんが唸る。重量のある編み笠を振り戻すには、慣性を殺すだけの時間がかかる。『せいんとくん』はニヤリと笑うと、敵手にむかって再度襲いかかった。

ゾミちゃんは体を捻って、なんとかそれを回避した。しかし狩衣の袖がツノにかかって、びりびりと引き裂かれる。ゾミちゃんが悪鬼のような表情を浮かべた。モデルが違うだけで、結局はこの二人ほとんど同類なのだろう。ここでようやく編み笠の振り戻しが終わって、ゾミちゃんはバックスイングを『せいんとくん』の頭に叩き込もうとした。だが『せいんとくん』、二本のツノをハサミのように使って、編み笠を挟んで受け止めた。童子の形相が、またも般若に変わった。

「や、やるわね、あんた」

「おまえ、もな」

8 ヴァルハラへ

編み笠を挟んで、二体のクリーチャーが睨み合った。傘など放棄してもよさそうに思えるが、ゾミちゃんはあくまでもそれを諦めない。もしかすると、ゾミちゃんの武器は傘だけなのかもしれない。「どうした、はなせば、いいだろ」

『せいんとくん』がニヤリと笑った。なんとも憎々しい笑顔だ。ゾミちゃんの顔に焦りの色が見えはじめた。

そのとき、タイヤの軋み音を響かせて、一台のクレーン車がS小路通りを走ってきた。俺はその車を見てぞっとした。運転席の上に折りたたんだクレーンの先端に、槍の穂先のようなものがついている。クレーン車はスピードを落としてバスターミナルに侵入すると、ちょうどそちらに背を向けている『せいんとくん』の背中に、ぴたりと進行方向を合わせた。

『せいんとくん』はクレーン車に気づいていない。いや、音がしたことには気づいているのだろうが、彼にとって注意を払うべき車というものがない。今まで存在しなかったため、恐らく気にする価値がないと思っっているのだろう。ゾミちゃんがうつすらと口元に笑みを浮かべた。その意図を知らずに、『せいんとくん』もニヤリと微笑む。クレーン車は『せいんとくん』の背中めがけて発進した。エンジン音が高まって、ぐんぐんスピードを上げていく。と、急にそのエンジン音がおさまった。奇襲をかけるのに、アクセルとクラッチを切って突っ込むつもりだ。

これは。卑怯ではないのか。いや殺戮機械だから。仕方ないよな。でも。背中から？ 心があるのに。

誰が命じた。自衛隊と警察に連絡しろと。K府民だし。お前だろ？ やらねばやられる。正々堂々。無用無用無用。俺はウソを。ウソをついていないとウソを。手錠を切ってくれたのは？

千葉県民？ 信用して。信用してくれて。
N県警の命令に背いて。

「せいんとくん、後ろだ！」
俺は叫んでいた。

はっとした『せいんとくん』は、一瞬だけ俺のほうを見た。そして俺の視界がどのあたりを見ているか、直感的に察したらしい。自分の後ろを振り向いた。そこにはクレールン車が迫っていた。体勢が変わったために、力比べはゾミちゃんに有利となった。『せいんとくん』は逃れようと、ツノを開いて編み笠を放した。だがゾミちゃんはその傘をねじって、巻き取るような動きで『せいんとくん』のツノを押さえ込んだ。

「あ、あーっ！ あああーっ！」

おぞましく、それでいて悲しげな声が、K駅前広場に響き渡った。俺は思わず目を背けた。凄まじい衝突音に続いて激しいブレーキの音が、摩擦に緩んだ広場のタイルが互いに打ち合う重たげな音が、続けざまに俺の耳に聞こえた。

目を上げると、『せいんとくん』は仰向けに倒れていた。広場の真ん中に血潮があふれ、巨大な肉体は胸のあたりを裂かれて、大きな手で必死に傷口を押さえようとしていた。だが、彼を手当てしてやろうという人間はいない。すでに足腰は立たない様子だった。急にあちこちから歓声が上がって、強化プラスチックの楯を持った機動隊員や警官隊が、広場に面した北極クラブやKタワー、金銀デパートの陰などから飛びだしてきた。勝負あったのだ。

ゾミちゃんが編み笠を振り上げ、『せいんとくん』にとどめを刺そうとした。

「待て！ 待ってくれ！」俺は駆け出していた。ゾミちゃんの巨大な顔が、虫けらを見るように俺を睨んだ。

「とにかく待ってくれ！ その、なんていうか」

「君もK府民、K市民だろう。なんでこいつの肩を持つんだね」

どこか上の方から、都鳥教授の声がした。見上げると、駅ビルの壁面にやたらと設けられたバルコニーのひとつから、メガホンを使つて俺に叫んでいる。俺はその問いに対する答えをためらつた。『せいんとくん』が聞いているのに、今さらK府民だなんて言えるか。『せいんとくん』はもう虫の息だつた。傷口を押さえる手に力が入らず、胸に載せた掌の間から、どくどくと血液があふれ出している。俺は彼のほつぺたの脇に歩み寄つた。ゾミちゃんが疑わしげに俺を見おろしている。クレーン車が不穏な空気を察したのか、バックでそろそろと退場しはじめた。『せいんとくん』は目玉だけを動かして、ぎよろりと俺の顔を見た。息が荒い。

「ちばの、ひと、だ」

「ああ、千葉の人だ。千葉県の人だよ」ウソだ。

「ぼく、ともだち、いない。だれも、たすけて、くれなかつた」

「すまん。おれじゃ何もできなかった」これもウソだ。彼らに連絡したのは、この俺だ。

「あなたは、ちがうよ。ちばの、ひと、だもの」違う、違うんだ。

「……」

「どうして、だれも、いつしよに、たたかつて、くれなかつた、の、かな？ どうして、ぼく、ひとりなの、かな？ どうして、ぼく、ここに、いるの、かな？」

「君は」「君は、」「きみは、」「……、」

俺の喉からとりとめのないウソが盛り上がつて、喉が詰まつた。

そして、ほかに言えるウソを、『せいんとくん』を傷つけないウソを探そうと俺が目泳がせたとき、この悲しい殺人奴隷の命は、肉体から逃げ去ってしまったのだ。

俺はK府反逆罪のかどで逮捕された。一週間拘留され、徹底的な取り調べを受けた。それに加えて府民としての自覚、市民としての義務、自意識、自己同一性、他者との関係構築能力、あらゆること

をテストされた。要するに、俺がおかしくなつてあのような行動に出たのか、政治的、思想的意図があつて、あるいはN県のスパイとしてああいう行動を行ったのか、確定しておこうというわけだ。だが彼らは結論を出せなかった。そりゃそうだ。俺は単純に、感情的意図によつて、『せいんとくん』にクレイン車の接近を教えたのだから。

拘留一週間目に、俺は都鳥教授の口利きで釈放された。教授は今や府のヒーローであり、ゾミちゃんを脇に従えた姿は、まるで平成のマッカーサーだった。教授が俺を救つたのには、打算があるに決まっている。俺を研究室に取り込んで、失われた可能性のある西大寺教授の成果の力ケラを、できるだけ集めておこうというのだろう。いいだろう、乗つてやる。でもタダじゃないぞ。

そして俺は都鳥研究室で博士号を取り、ペーパーではあるが助手のポストを手に入れた。都鳥教授は京野ゾミを皮切りに、ひこなめ881（やばい）ちゃんなどの人造人間化に成功し、ゲテモノ研究者の汚名を返上した。と本人は思っていたようだが、ゲテモノ研究者としての地位を確立したというほうが正しい。俺は教授の手伝いをしながら、密かに自分の研究を推し進めた。いつか、いつか都鳥教授の影響下から逃れて、ピンでこの研究を続けるために。そしてあるとき俺が裏切つた『せいんとくん』を、平和的で愛くるしい人造人間として、この世に蘇らすために。

（了）

8 ヴァルハラへ（後書き）

奈良県民のかた、ごめんなさい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1130f/>

鹿角戦士せいんとくん

2010年10月8日15時52分発行